

## 「コスモスが咲く藤原京」

担当:3丁目 井守 徳弘

(予定コース)

近鉄橿原線八木駅—大神宮燈籠—横大路発掘説明板—接待場跡—  
横大路(伊勢街道)—札の辻—下ツ道(中街道)—小房観音寺—  
藤原京資料室—大極殿跡—近鉄橿原線畝傍御陵前

(約5km・午後5時ごろ解散予定)

### ●太神宮燈籠

今の場所から東へ200mの接待場と伝承される場所に江戸時代中期の明和8年(1771)設置されたものであり、移動されたものです。

横大路付近には、この街道を西から東に向かう旅人の道しるべとして、伊勢皇太神宮(内宮)信仰による高灯籠が立てられています。

これはその一つです。

江戸時代の末、この街道を、伊勢神宮へのおかげ参りの大群衆が、何万人となく、乱舞しながら通過し、街道沿いの人々は、大いに布施を行ったことが、文献にも、また絵馬にもなって残っています。



三宅町屏風杵築神社のおかげ参りの絵馬

## ●横大路発掘説明板

横大路は、桜井市の三輪山の南から葛城市の二上山付近まで東西にほぼまっすぐに設置された道である。

難波京と飛鳥京を結ぶ官道のひとつとして整備された。別名として、伊勢に至るこの道は伊勢街道(伊勢本街道)とも呼ばれる。

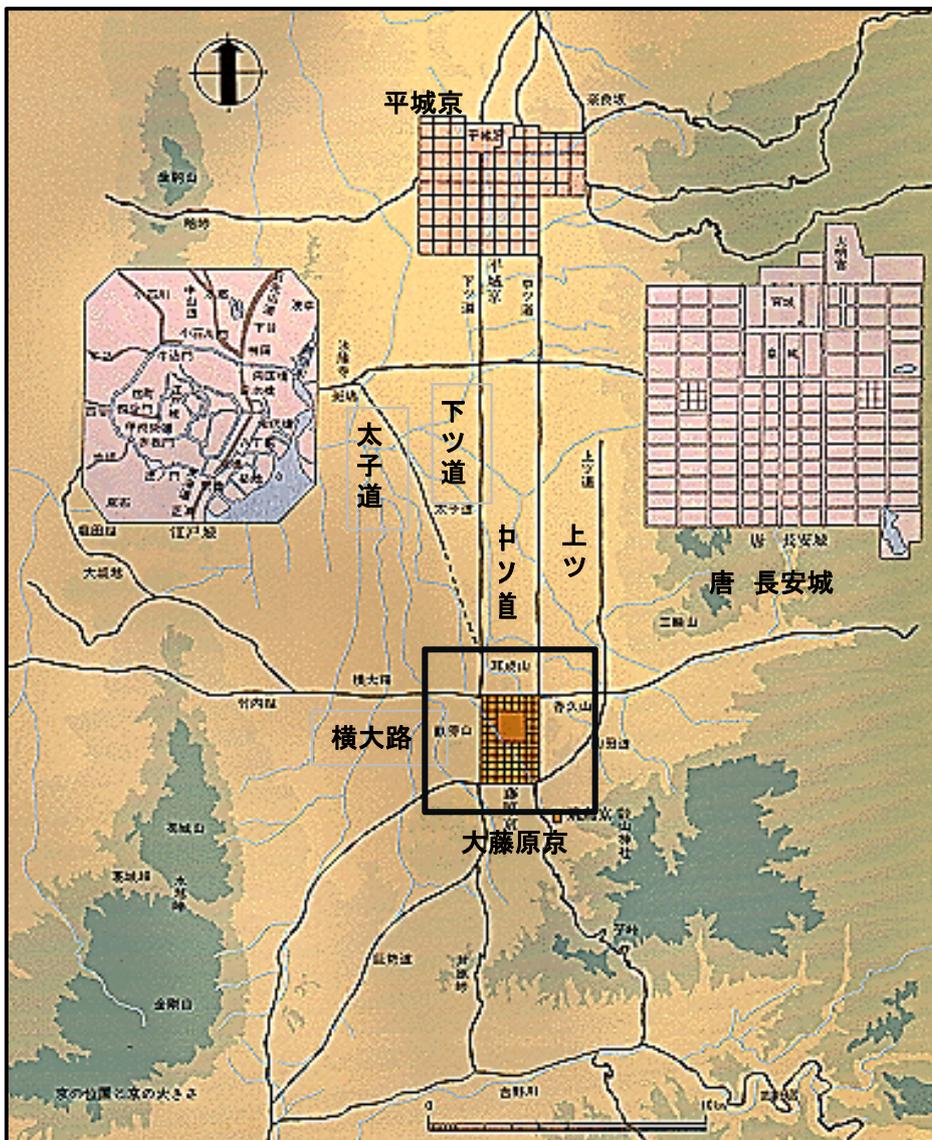
現在の国道166号線の一部区間そのもの、および国道に平行している。

東側では伊勢国への伊勢街道および初瀬街道に、西側では和泉国に至る竹内街道および長尾街道に接続します。

飛鳥時代には、大和朝廷に向かう外国使節なども、盛んに往来し、中世には長谷寺、当麻寺への参詣人や、伊勢参りの人々でにぎわい、時代を通じて、国道としての役割を果たしてきました。

八木の町は、こうした古代からの幹線道路の交差する地として発展し、現在も今井町をはじめとする歴史的遺産が残されています。

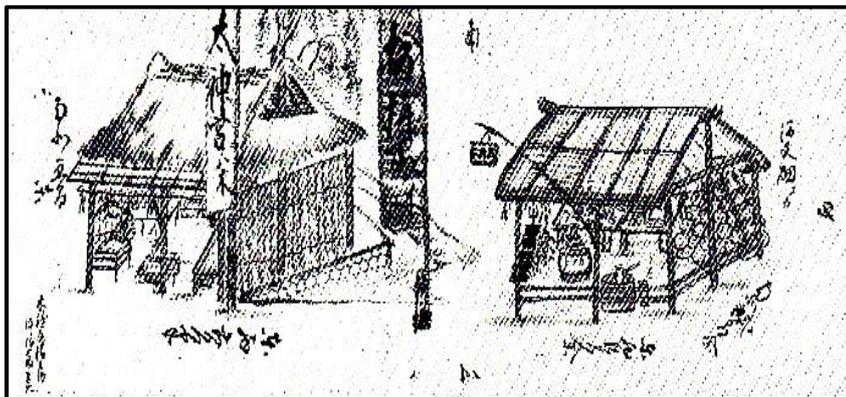
古代からの幹線道路とは、飛鳥時代の古道である「下ツ道」と、「横大路」のことです。



大和の古道と中国(唐)長安城

## ●接待場跡

ここが大神宮燈籠のあった元の位置です。



伊勢路見取絵図八木接待場の様子

伊勢太神宮燈籠が灯され、そこに小屋が建てられ、振る舞いと供食の場としての接待場が賑わったといわれています。

宿泊者名簿から一日100人以上の者が1軒の旅籠(はたご)に泊まっており、多くの参拝者の通行があったことが判りました。

## ●札の辻

この下ツ道と横大路の交差点は、江戸時代には高札の架かる場所とされ、札の辻と呼ばれ、商業の中心地としても栄えました。

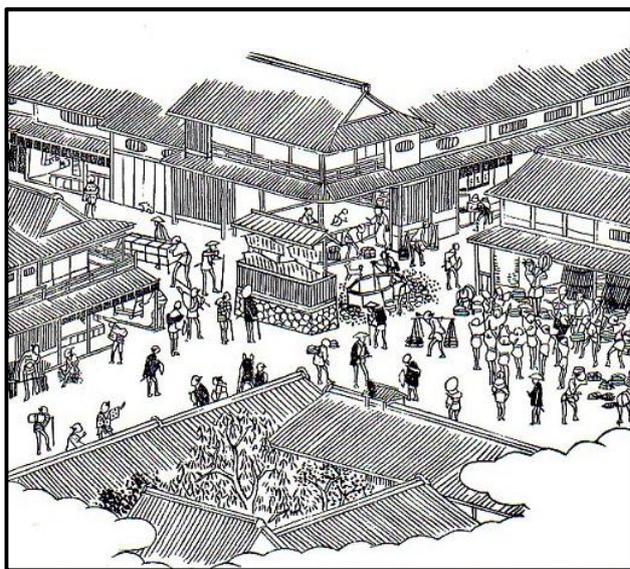
江戸時代には札の辻を中心に73軒もの商家や旅籠、茶屋など、様々な商売が営まれ賑わいを見せました。また伊勢へ向かう「おかげ参り」の人々を助けるために町の人々が食事やお茶をふるまう接待場などもありました。

この町を松尾芭蕉や本居宣長、吉田松陰など著名な人たちが、足跡を残しています。

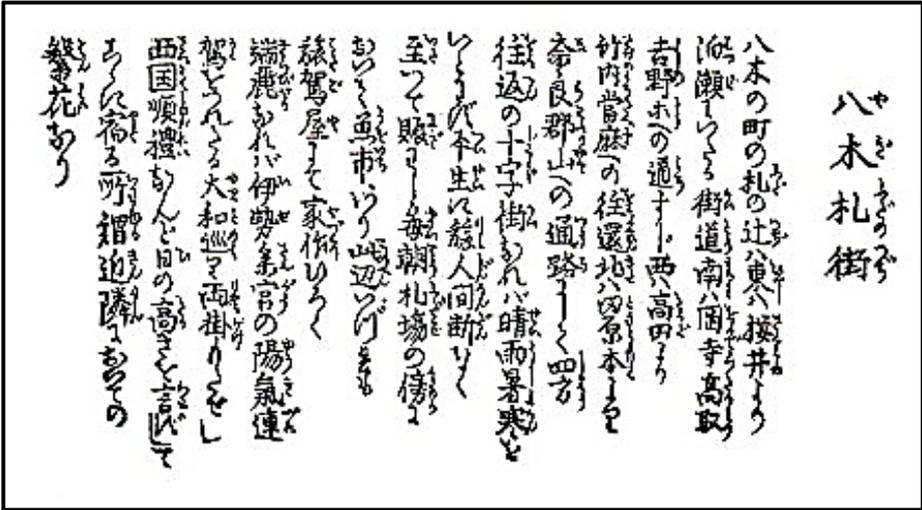
芭蕉は子この地に4月の終わりに泊まったのでしよう、

「草臥(くたび)れて宿かる比(ころ)や藤の花」

という句を詠んでいます。公民館に芭蕉の句碑が残されています。



『西国名所図会』(江戸時代後期の札の辻の姿



『西国名所図会』の上部の詞書

八木札街(やぎふだのつじ)

八木の町の札の辻は、東は桜井より泊瀬(はつせ)にいたる街道  
 南は岡寺・高取・吉野などへの道筋、西は高田より竹内・當麻への往還  
 北は田原本より奈良・郡山への通路にして、四方往返の十字街なれば、  
 晴雨暑寒をいとわず、平生に旅人間断なく、至って賑わし。毎朝札場の傍ら  
 において魚市あり。

この辺り、いずれも旅籠屋にて家の造りは広く、端麗なれば、  
 伊勢参宮の陽気連れ、駕(かご)を連れたる大和巡り、両掛けもたせし  
 西国巡礼など、いわゆる近隣においての繁花(華)なり

●下ツ道

7世紀中頃に、奈良盆地を南北に走る大道・下ツ道として整備された。  
 見瀬丸山古墳の前面を起点とし、藤原京の西四坊大路(現在の橿原市八木  
 辺り)から、奈良盆地の中央をまっすぐ北へ進み、平城京の朱雀大路(現在の  
 平城宮跡)に至る。

橿原市から大和郡山市にかけては、現在の国道24号の約250m西方に並行  
 する。

北は、那羅山(ならやま)の平坂(ならさか)を越えて山背道(やましろのみち)  
 になり、南は、軽(かる、橿原市大軽町)の丸山古墳(旧見瀬丸山古墳)まで  
 が直線道で、檜隈(ひのくま)からは西南に向かう巨勢道となり、宇智(うち)を  
 経て紀伊国境の真土山(まつちやま)を越えると紀ノ川沿いの木道(きのみち)  
 に達する。

奈良時代には飛鳥・藤原京と平城京をまっすぐ繋ぐ大道として盛んに利用  
 されたと思われる。

### ●小房観音寺(境内無料・本堂内拝観料 300円)

おふさ観音は、橿原市小房(おうさ)町にある寺院の通称名である。山号は十無量山。正式名称は高野山真言宗別格本山 十無量山 観音寺。大和三山の耳成山と畝傍山のほぼ中央に位置する寺院で、本尊は十一面観世音菩薩です。この十一面観世音菩薩はボケ封じに御利益があるそうです。よくお参りしてください。

イングリッシュローズを中心に約1800種およそ2000株バラが境内で栽培・展示されている。鉢植えで管理され、バラまつりの期間中で花を用いて曼荼羅を境内に表現したとして、寺では花まんだらと称している。

昔この地にあった「恋が淵(鯉が淵)」と呼ばれる池を土地の娘”おふさ”さんが通りがかった時に白い亀の背に乗った観音様が霧の中に浮かんでいる姿をご覧になったそうです。そこで、この地に小さなお堂を建てて観音様が奉られたのが起源だそうです。

この話にちなんで、今も境内には鯉の池や亀の池が伝わっています。

### ●藤原京資料室(入場無料)

藤原京資料室は、世界遺産登録を目指しております「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産である「特別史跡藤原宮跡」をより理解することを目的に、平成18年10月にJAならけん橿原東部経済センターの2階に開設されました。

展示物は、藤原京の1,000分の1模型(約6m×7m)や、出土品(柱や瓦)、解説パネル、当時の柱を再現したもの、記念撮影用看板、古代衣装をまとった人形などです。モニターテレビでは、当時の藤原京の様子を詳しく再現したコンピュータグラフィックスや人々の暮らしについて解説したアニメを上映しております。写真展示コーナーでは、藤原宮跡で咲く花々の写真や「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産の写真を展示しています。

「飛鳥・藤原の宮都とその関連遺産群」は、平成19年1月30日に世界遺産委員会事務局の暫定リストに登録されています。

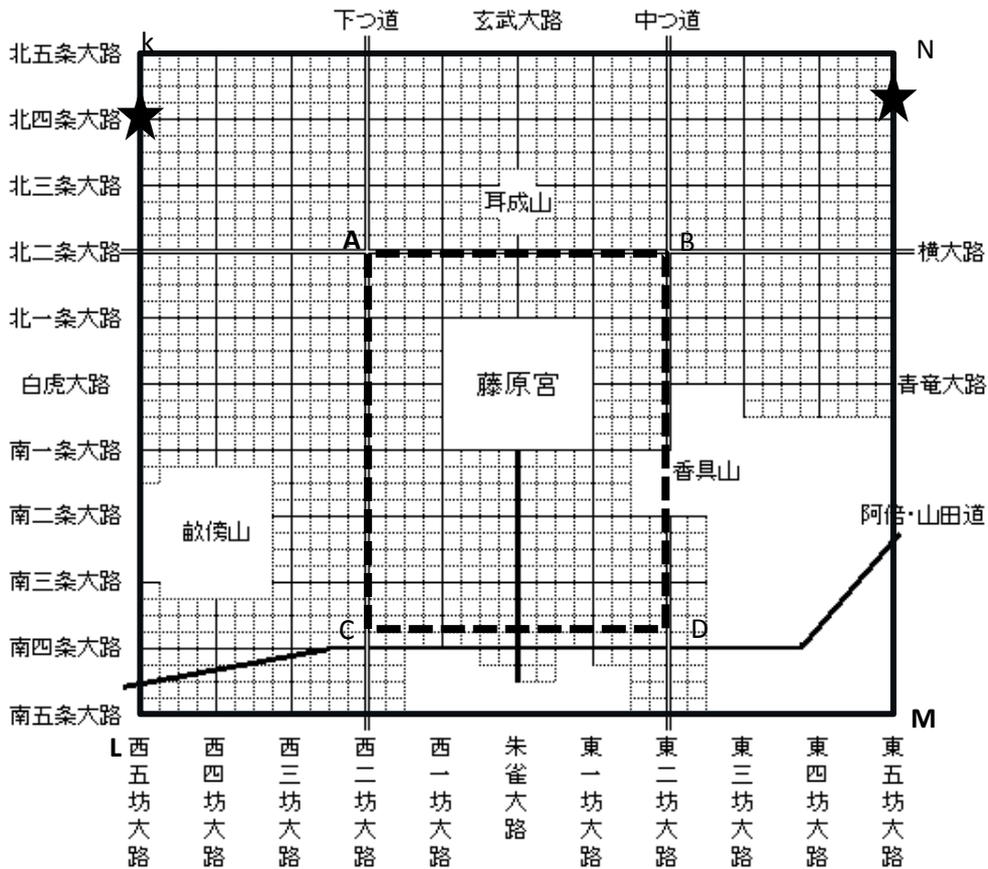
### ●藤原京

藤原京は、日本史上最初で最大の都城である。また、日本史上最初の条坊制を布いた本格的な唐風都城でもある。

この都城は、周礼(しゅうらい)が説く思想を表していたとされている(周礼は、中国、最古の礼書の一つ。『礼記』儀礼』とあわせ「三礼」ともいう。紀元前1046年頃～紀元前256年の周王朝の理想的な制度について周公旦が書き残したものとされるが、実際には少なくとも、紀元前403年～紀元前221年の戦国時代以降の成立と見られる。)

持統4年(690)に着工され、飛鳥浄御原宮から持統8年(694)に遷都した。完成は遷都後10年経過の景雲元年(704)と言われ、着工時期は天武5年(676)新木(にいき、大和郡山市新木)に都造りを思われたが、予定地は大変荒廃しており、都は作られなかったと、『日本書紀』に記述がある。このころより新都造営を計画をし始めていたと、考えられる。

藤原京は持統8年(694)12月6日から和銅3年(710)3月10日までの16年間、持統・文武・元明の三代の天皇が都としました。

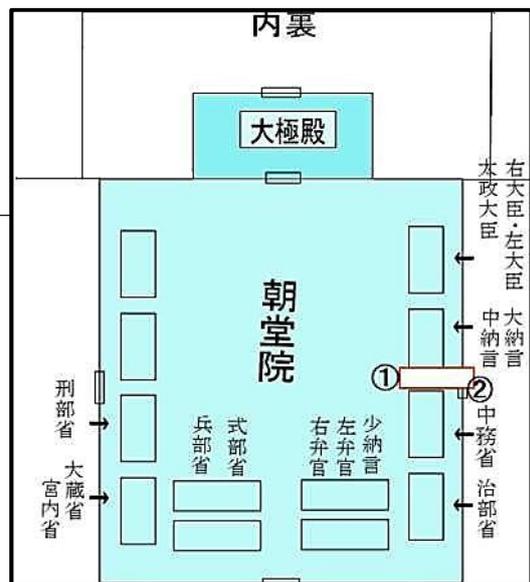


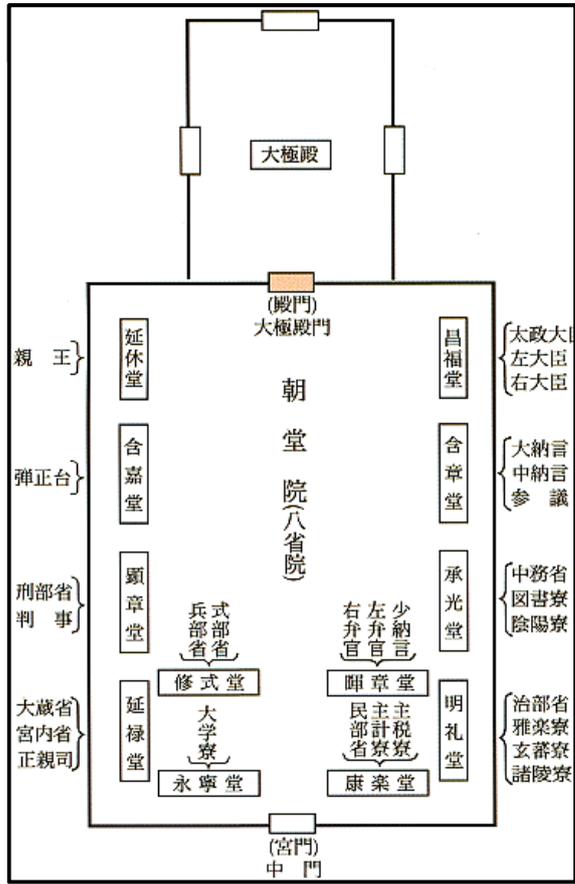
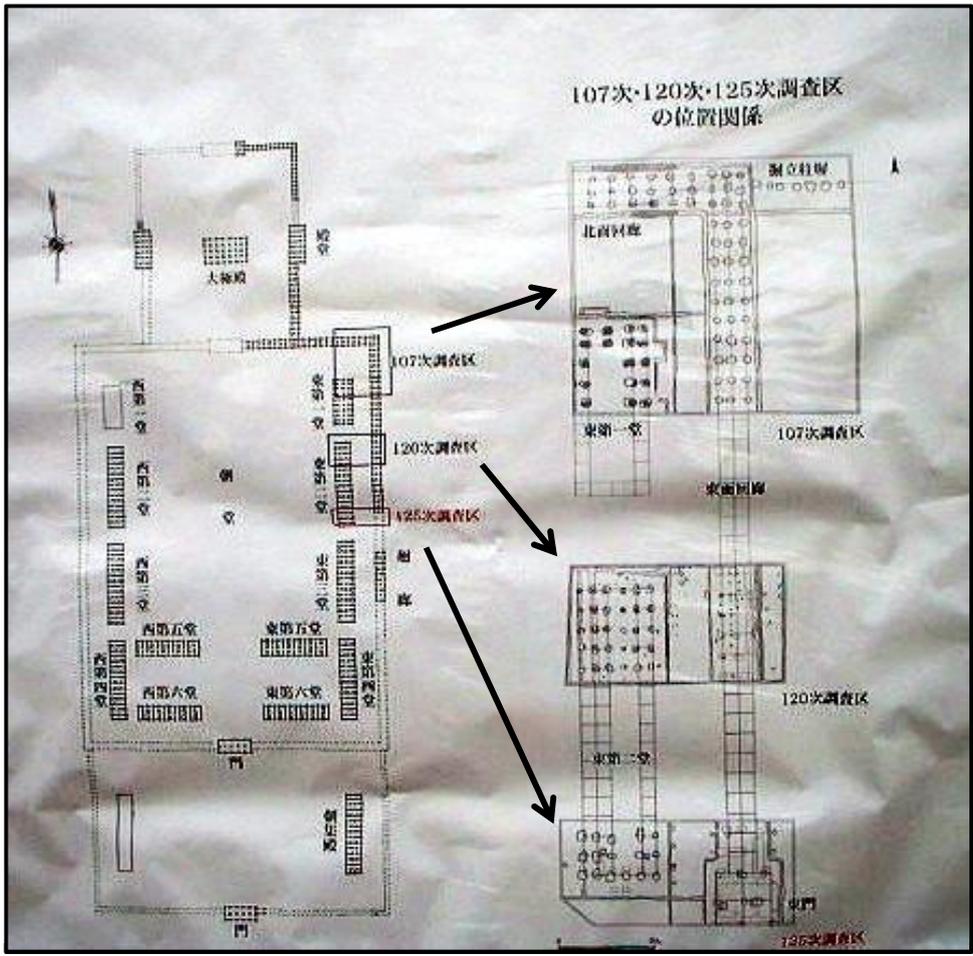
従来ABCDで岸俊男説が定説となっていたが、現在は発掘調査が進みKLMNの大藤原京の考え方が主流になってきた。

★ マークの発掘調査で橿原市の土橋遺跡と桜井市の上の庄遺跡の二カ所で大藤原京の東西の両京極が判明しました。つまり、条坊道路の側溝がそこよりも外に伸びないことがはじめて確認されたのです。しかし、南北の京極はまだ確定されていません。

さきほど述べた、『周礼』という書に「正方形の都の中央に皇帝の宮があり、それを中心として、周囲に道路が通じ、宮の前面に政治を行う朝堂、後ろに市場を置く」とあり、まさに大藤原京そのものです。

これらの説を出しているのは、小澤毅(奈良文化財研究所)、中村太(北海道教育大学)らである。





## ●大宮土壇(藤原京の大極殿跡)

藤原宮の中で最大の建物は大極殿である。重要な政治や儀式の際に天皇の出御する建物で、正面9間(45m)、側面4間(20m)、基壇を含めた高さは25mはあったと推定されている。

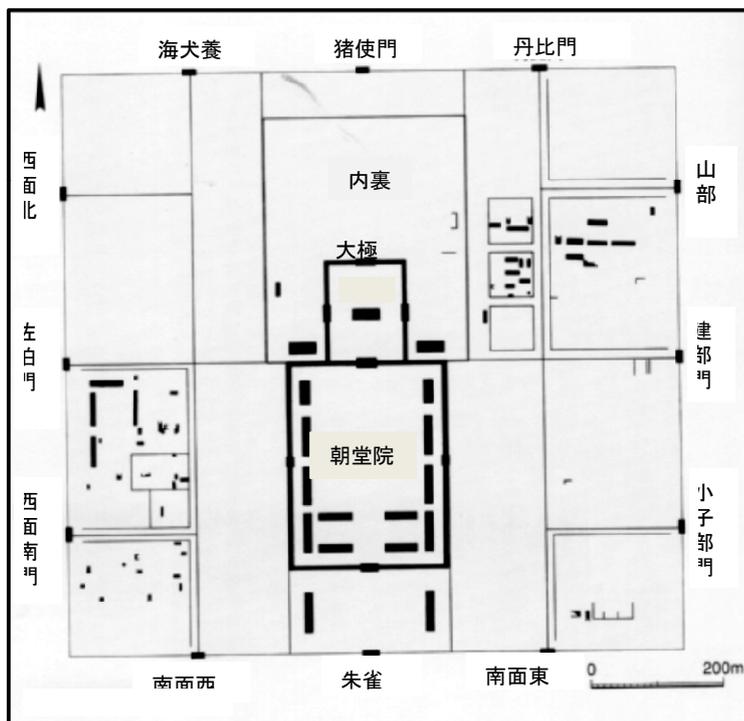
現在は基壇の跡が「大宮土壇」として特別史跡に指定されている。その一角に「持統天皇文武天皇藤原宮跡」と大書した古い石碑が建っている。奈良県教育会が大正4年(1915)11月に建てた石碑である。

この場所には、大宮土壇という周囲よりも少し高くなった土地(東西40m、南北30m、高さ1,8m)があり、そこが藤原京大極殿跡という説を発表したのが江戸時代の賀茂真淵です。

昭和8年(1933)、大宮土壇の横で小学校の新校舎建設の際に、瓦や礎石と思われる石材、加工された凝灰岩(ぎょうかいがん)が出土したのです。これをきっかけとして、同年、奈良県史蹟調査会が発掘を行ったのが藤原宮の発掘調査の始まりでした。

藤原宮はほぼ1km四方の広さであった。周囲をおよそ5mほどの高さの塀で囲み、東西南北の塀にはそれぞれ3か所、全部で12か所に門が設置されていた。南の中央の門が正面玄関に当たる朱雀門(すざくもん)である。藤原宮は、南北約600m、東西約240mにおよぶ日本で最大の規模を持つ朝堂院遺構である。

大極殿などの建物は日本の宮殿建築では初めて中国風に瓦葺で造られた。



昭和52年(1977)、大極殿北側の側溝から「海評 佐々里 阿田矢 軍布」という藤原京造営時の木簡が発見され、遷都(694年)以前に隱岐が大和朝廷によって支配されていたことが判っています。

『倭名鈔』に「隱岐國海部郡佐作郷」とあること、杉材でつくられていることから現在の島根県隱岐郡海士町、評は郡と同じこおりといわれています。

税目の木簡

藤原宮跡大極殿院



海評佐々里

阿田矢  
軍布

アイヌ語の「コンプ」の音を写して昆布を「軍布」と表記された。

### ●朝堂院と大極殿門

大極殿は藤原京の中心となる建物で、それを囲む、東西115m、南北155mの範囲を大極殿院という。大極殿院の南の中央に朝堂院につながる門があった。門の規模は、正面約30m、側面約15mだったと推測されている。写真の発掘場所に門があった。ここより南に30mの位置に柱が復元されている。



## ●朱雀大路跡

藤原宮の南正門、朱雀門に当たる門については、戦前日本古文化研究所発掘の「朝集殿院南門」が、最近の再確認調査等の結果、藤原宮朱雀門に比定しうるまでに至ったが、この推定朱雀門から南に延びる朱雀大路については、昭和51年(1976)、橿原市の市営住宅建設に伴う発掘調査によって、幅4m、深さ0.4mの南北大溝2条が検出され、溝中から藤原宮跡と同時期の遺物が出土することもあるが、幅21mの大路の存在が確かめられるに至った。

この幅21mという規模は、平城京朱雀大路(幅74m)に比せば遙かに狭いが、藤原京朱雀大路の存在が確認されたことは、藤原京が中国の都城制に倣って計画されたことを考古学的に立証する有力な資料となるものであり、藤原京の全体像を解明する上でも重要であります。

芝生を貼っているところが路面で、バラスを敷き両側を石積みしているところが側溝です。

## ●西面南門跡

藤原宮跡の西側、市立鴨公幼稚園の裏手の溜池の前には、藤原宮の宮城門(西面南門)を復元した一角があります。

説明文では「約1km四方の藤原宮の外周は2.7km間隔で柱を立て並べた掘立柱塀(大垣)で、その各面には3ヶ所、計12ヶ所の宮城門がありました。発掘調査では門の跡は見つかりませんが、この付近だけ柱穴がないことから、門があったことがわかります(一部を抜粋)」とある。

## ●本薬師寺跡

『日本書紀』天武天皇9年(680)11月12日条には、天武天皇が後の持統天皇である鸕野讃良皇后の病氣平癒を祈願して薬師寺の建立を発願し、百僧を得度(出家)させたところ、病氣は平癒された。しかし、天武天皇は寺の完成を見ずに朱鳥元年(686)に薨去し、伽藍整備は持統天皇、文武天皇の代に引き継がれた。

『続日本紀』によれば、文武天皇2年(698)には寺の造営がほぼ完成し、僧を住まわせている。この創建薬師寺は、藤原京の右京八条三坊の地にあった。

和銅3年(710)の平城京への遷都に際して、薬師寺は藤原京から平城京の六条大路に面した右京六条二坊(現在地)に移転した。

移転の時期は長和4年(1015)成立の『薬師寺縁起』が伝えるところによれば養老2年(718)のことであった。

11世紀成立の『薬師寺縁起』に引用される奈良時代の流記資材帳に「薬師寺には塔が4基あり、うち2基は本寺にある」という趣旨の記載があり、ある時期までは平城京と藤原京の両薬師寺にそれぞれ2基の塔があったと解釈されることから、非移建設の根拠の一つとしており、すべてが移設されずに一部が残ったのではないかと考えられます。

## ●なぜ藤原京から平城京に遷都したのでしょうか。

朱鳥元年(688)9月天武天皇が崩御した。

皇位継承者は天武の子の皇太子草壁皇子とみなされたが、すぐには即位できなかった。

翌月の10月に大津皇子の謀叛事件が起き、2年に及ぶ服喪期間が終わり、落ち着きを取り戻したと思われたときに、草壁皇子が病死してしまい、翌年正月に即位をしたのは天武の皇后であった鸕野皇女で、即位して持統天皇となった。

そして、持統8年(694)12月の飛鳥浄御原宮から藤原京に遷都を行った。文武天皇は文武元年8月(697)祖母、持統天皇から皇位を譲渡され即位した。持統が初めて太上天皇を称し後見役についた。

恒久の都として営まれたはずの藤原京であったが、慶雲4年(707)2月に五位以上の者に詔を下し、遷都のことを審議させた。しかし、その4ヶ月後の慶雲4年(707)6月に文武天皇が24歳で崩御してしまった。

残された孫の首(おびと)皇子(後の聖武天皇)はまだ幼かったため、中継ぎとして、草壁皇子の正妃であるが、初めて皇后を経ないで即位したのは、慶雲4年7月17日(707)のことであった。

和銅元年(708)正月に奈良盆地北端の平城の地に決定し、造営に着手。そして、2年後の和銅3年(710)3月10日に平城京に遷都した。

左大臣・正二位の石上朝臣麻呂を、藤原京の留守司とした。

ここに藤原京は16年間(平城京は74年)の短い歴史を閉じた。

## ●平城京に遷都した理由・事情は何か。

戦前の歴史学者である喜田貞吉(きたさだきち)は、

①藤原の地が大和三山に囲まれて狭小であり、また四方への交通に不便であった。

この説は、戦前の発掘で狭く小さい藤原京と意識されていた。横大路の発掘進んでおらず、東西の交通が不便とされていた。

②中央集権国家を建設してゆく上で、飛鳥地方の旧勢力の圧力を避ける必要があった。

この説は、物部・蘇我と相次いで滅んでおり、中臣(藤原氏)の時代に入っており、旧勢力はなくなっていた。

③藤原京に対して平城京は、地形が優れ、天子南面に適合し、かつ難波などへ向かう交通の便が良くなる。

藤原京は大極殿が真ん中にあり、天子南面には不向きである。

難波に向かう道は横大路から竹内街道を経て行く道があった。

ただ、藤原京は南方が山であり、南に向かって緩やかに登りとなる。そのため、川の水の流れは南から北に流れている。

このために中央にある貴族たちの住まいや藤原京の内外に穢臭があった。

庶民の「下のもの」が流れてくるため、衛生面や臭いに我慢ができず、16年が限界とする見方もある。

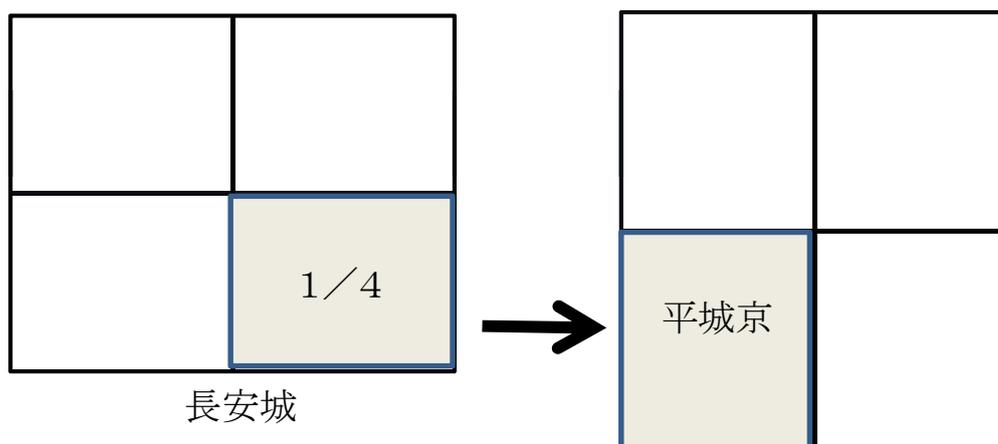
④遷都を主導したのは藤原不比等とみられること。

これは明らかに上位の左大臣・正二位の石上朝臣麻呂を留守司という閑職に追いやり右大臣であったNO2が主導権を握った。

その後の研究者は、

- ⑤慶雲年間(704~708)にしばしば起こった全国的な飢饉疫病に対し、遷都によって攘災招福を期待した。(坂本太郎・東京大学)
- ⑥④を深化させ、文武天皇没後の不安定な皇位継承問題に藤原不比等が積極的に関与し、自分の別邸があった地(?)に宮を誘致して首皇子の即位を目指した。(林陸朗・国学院大学)
- ⑦大宝律令の制定を契機に急速に成長し始めた中央集権的国家にふさわしい首都を建設するという政治的欲求(岸俊男・京都大学)
- ⑧大宝2年(702)に渡唐し、慶雲元年(704)に帰国した粟田真人を筆頭とする遣唐使による情報を元にし、最新の都・長安城をモデルとした新たな都づくりが要請された。(井上和人・奈良文化財研究所)
- ⑨孫の首皇子即位に向かって流れをつくった不比等は、孫のために壮大な舞台を用意せねばならなかった。それは同時に藤原氏一族のためでもあった。(千田実・奈良県立図書情報館長)
- ⑩中国・長安城と比較し平城京は1/4とした。  
長安城の1/4とすることで則天武後の了解を取り付けた。

	長安城	1/4	平城京
東西	9.72km	4.86km	4.28km
南北	8.65km	4.33km	4.79km



平城京は南北を長くしたいと長安城の1/4でありながら朱雀大路を長く(約500m多く)約3.7kmを実現した。

この1/4説は、粟田真人が天智天皇8年(669)以来に32年ぶりとなる遣唐使となり唐に渡った目的として、白村江の戦い以来冷却していた唐との交流を回復するとともに、天武天皇以来の改革で日本に本格的な首都および律令体制が完成したこと、天皇号および「日本」の国号が成立したことを唐に対して宣言することなどを目的とした、非常に重要な使節であった。

しかし当時、唐王朝は武則天(則天武后)による篡奪で周王朝に代わっていたことを日本側が把握しておらず、粟田真人らは混乱を生じた。

また、彼らが都・長安で見た実際の都城は太極宮を含む皇城は、都城の北端中央にあり、律令も大きく異なるものであった。大きな衝撃を受けて慶雲元年に帰国した粟田真人らは、これら日中の都城や律令制の差異を報告し文武朝の改革に生かされて行った。(井上和人・奈良文化財研究所)



## ●参考文献

- ・古都発掘 田中琢編 岩波新書 1996年 (株)岩波書店
- ・藤原京の形成 寺崎保広 2002年 (株)山川出版社
- ・飛鳥古京・藤原京・平城京の謎 寺沢龍 2003年 (株)草思社
- ・律令貴族と政争 木本好信 2001年 (株)塙書房
- ・奈良時代の藤原氏と諸氏族 木本好信 2004年 (株)おうふう
- ・研究史 飛鳥藤原京 八木充 平成8年 (株)吉川弘文館
- ・藤原京1300年 飛鳥・奈良宮都 小松左京他 1998年 (有)有学書林
- ・日本書紀(下) 宇治谷孟 昭和63年 (株)講談社
- ・続日本紀(上) 宇治谷孟 1992年 (株)講談社
- ・飛鳥・藤原京展図録 奈良文化財研究所 2002年 朝日新聞社
- ・ウィキペディア フリー百科事典

## 藤原遷都からの主要人物年表

西暦	出来事	持統天皇	文武天皇	元明天皇	元正天皇	聖武天皇	光明皇后	藤原不比等		石上朝臣麻呂		
		天皇位	第41代	第42代	第43代	第44代	第45代			(676~677新羅大使)		
		父	天智天皇	草壁皇子	天智天皇	草壁皇子	文武天皇	藤原不比等	藤原鎌足		物部宇麻呂	
		母	蘇我遠智娘	元明天皇	蘇我姪娘	元明天皇	藤原官子	橘三千代	鏡王女		不詳	
694	藤原遷都	50	12	34	15			36		55	直広参(正五位下)	
695		51	13	35	16			37		56		
696		52	14	36	17			38		57		
697	不比等の娘官子、文武に入内	53	15	37	18			39		58		
698		54	16	38	19			40		59		
699		55	17	39	20			41		60		
700		56	18	40	21			42		61		
701	宮子、首皇子を産む	57	19	41	22	1	1	43	正三位大納言	62	正三位大納言	
702	大宝律令施行	58	20	42	23	2	2	44		63	大宰帥	
703		没59	21	43	24	3	3	45		64		
704	粟田真人唐から帰国		22	44	25	4	4	46	従二位大納言	65	従二位右大臣、2170戸	
705			23	45	26	5	5	47		66		
706			24	46	27	6	6	48		67		
707			没25	47	28	7	7	49	食封3000戸	68		
708	平城に都造営始まる。12月地鎮祭			48	29	8	8	50	正二位右大臣	69	正二位左大臣	
709	元明天皇平城京へ行幸			49	30	9	9	51		70		
710	平城遷都			50	31	10	10	52	興福寺創建	71	藤原京留守司	
711	平城京の垣は未完成			51	32	11	11	53		72		
712	古事記撰上			52	33	12	12	54		73		
713	風土記撰上・首皇子の後継確立			53	34	13	13	55		74		
714				54	35	元服14	14	56		75		
715				55	36	15	15	57		76		
716				56	37	16	16	58		77		
717				57	38	17	17	59		没78	従一位追贈	
718				58	39	18	18	60				
719				59	40	19	19	61				
720	日本書紀撰上			60	41	20	20	没62	正一位太政大臣追贈			
721				没61	42	21	21					
722					43	22	22					
723					44	23	23					
724					45	24	24					